

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

エクセリアの策

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：200000 点
- ・ 資金：352500G
- ・ 名誉点：2000 点
- ・ 成長回数：333 回
- ・ マジテックトームストーン：戦記 2500 以上、詩学 1500 個
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上

制限事項

- ・ 放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・ バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・ 戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・ レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・ 成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

メモ群

導入

《占星台》より、邪竜の眷族に動きあり。

臨戦態勢に入った帝都等護は、客人である君達を差し置いて、戦乱へと入っていく。

君達は、頭を冷やすため、シンファクシ家の屋敷の外にいた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアも駆けつけ、状況を整理する。

エクセリア

「邪竜の眷族による、等護への再攻撃…。これが実行に移されれば、喻え撃退できようと大きな被害が出ることに違いはない。策がないわけではないが…」

リーン

「…忘れていませんか？ドラゴン族と、対話した人がいることを…」

(※GMメモ：RP待機)

氷の巫女が存在に行き当たり、君達はなるほど、と言うべき思考に行き当たるだろう。
しかし、エクセリアの表情は晴れない。

エクセリア

「あいつを仲間に引き入れることは難しい…。だが彼女に、明示的に悔悟の念があるのであれば…」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「フェルニゲシュに攻撃を思いとどまらせるんだ。そうすれば…」

????

「その旅路、俺も同行させてもらおう」

そこに、男の声が響く。

(※GMメモ：RP待機)

現れた竜騎士は、君達を一瞥すると、腕を組んだ。

エクセリア

「お前は…当代の『蒼の竜騎士』の…」

ヴォルフラム

「ヴォルフラムだ。同業のエルンストからは噂は聞いているぞ。

怨嗟に猛り狂うフェルニゲシュ相手に、交渉が通じるとは思わんが、幾許かの時間は稼げるかもしれん。それに、俺が持つ『竜の眼』の力と、光の戦士がいれば、奴を仕留め、この戦を終結させることも…」

(※GMメモ：RP待機)

彼の発言を吟味し、エクセリアは話すべき言葉を見定める。

エクセリア

「高名な『蒼の竜騎士』が同行してくれるというなら、これほど心強いことはないが…、あくまで戦闘は最終手段、まずは交渉が優先だ」

ヴォルフラム

「好きにするがいいさ。『氷の巫女』にしたって、すぐに捻り潰そうだななんて思っちゃいない。ただし、ミシガンに詳しいことは伝えるなよ。異端疑惑に、奴を巻き込むわけにはいかんからな」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「承知した、ヴォルフラム殿。それでは同行の件、こちらからも、お願いさせていただくよ。…よろしく頼む」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、蒼の竜騎士ヴォルフラムを仲間に引き入れた。

氷の巫女を探して

エクセリア

「なんとしても『氷の巫女』を見つけて、対話に持ち込もう。…が、そうしようにも、ヴァルマーレ側から先制攻撃が行われれば、交渉は破綻する。

出発前に『神道衛士団本部』に立ち寄ろう。事の詳細は話せないまでも、『ミシガン』卿に相談し、先制攻撃論を封じてもらう」

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「じゃ、じゃあ、私は——」

エクセリア

「リーン、君はシンファクシ伯爵達に、私達の作戦を伝えておいてくれ。その後は、シンファクシ家の屋敷で待機だ」

そう言って、エクセリアは神道衛士団本部へと向かおうとするだろう。

リーン

「ま、待って…！制御できない力では、ダメだと言うんですか！？」

(※GMメモ：RP待機)

リーンの質問を受け、エクセリアは少し悩んだような唸り声を上げる。

エクセリア

「うーん、私はそう言う意図で待機を命じたわけじゃないんだけどな。

とりあえず言えることは、私達には伝令役がいないということだ。

だから、リーンにはそれを成してもらいたい」

そう言って、今度こそ足早に、神道衛士団本部へと向かうのだった。

(※GMメモ：RP待機)

君達も、それを追って神道衛士団本部に向かうことになる。

神道衛士団本部の上層の、人の行き来を管理する、なんとなく渋い声を出しそうな見た目の衛士に、声をかける必要がある。

渋い声の衛士

「何の用だ？」

(※GMメモ：RP待機)

渋い声の衛士

「なるほど、ミシガン総長に。面会の段取りをさせてもらおうぞ」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、渋い声の衛士に案内される。

神道衛士団本部・総長室

総長室にて、肉を勧めてきそうな筋骨隆々の衛士が、部下の衛士から話を聞いていた。

ミシガン

「第三区の防備を固めろ。対竜バリスタの整備を怠るな！」

神道衛士

「ハッ、了解であります！」

そこへ、君達が訪れるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

ミシガン

「ああ、お前達か。知っての通り、邪竜の眷族による帝都再攻撃に備え、万全を期すよう指示を飛ばしているところだ。奴ら、既に再集結をしていると聞くが？」

エクセリア

「お忙しいところ申し訳ありません。話というのも、件の再攻撃に関することなのです。…邪竜の眷族の侵攻を止める手立てが、あるやもしれません」

ミシガンが興味深そうに腕を組む。

エクセリア

「現時点で詳しいことを申し上げられないのですが、我々が対策を講じている間、先制攻撃を抑えるよう、宮内庁に働きかけてはいただけないでしょうか？」

ミシガン

「侵攻の阻止が可能ならば、是非にと思うが。その手法はなんだ、最果ての聖王？」

(※GMメモ：RP待機)

ヴォルフラム

「俺も同行するつもりだ。彼らの手法が成功するかはともかく、敵戦力の切り崩しと、フェルニゲシュの足止めはできそうでね。宮内庁の主戦論者たちにしても、どうせ硝酸はないのだろう？ 征戦だなんだと威勢だけはいいものの、具体性に欠けるといのが連中じゃないか」

名乗りを上げるように、ヴォルフラムが声を張る。

ミシガン

「そうはいうがなヴォルフラム。確かに先制攻撃は馬鹿馬鹿しいうえ、帝都の防備を固めたいところではある。蒼の竜騎士と光の戦士殿が、邪竜『フェルニゲシュ』の足止めに出陣するというのなら、説得材料としては強い。だがな、ヴォルフラム。その手法は？」

ヴォルフラムが黙れと言わんばかりにガンを飛ばす。

(※GMメモ：RP待機)

一触即発なんてレベルじゃねえ、もっと恐ろしい状況になることを察知して、君達が止めに入るだろう。

ミシガン

「…いいだろう。お前達が俺のことを案じてくれているのは理解しているつもりだ。

宮内庁との交渉は引き受けるが、くれぐれも無茶はするなよ？」

(※GMメモ：RP待機)

交渉は成立した。あとは、氷の巫女を探すでしょう。

一方、宮内庁〔1〕

宮内庁にて、昌三が有仁に面会していた。

有仁

「…騒がしいな」

昌三

「ハッ…。邪竜の眷族の再攻撃が近いと、《占星台》から警鐘が発せられたもので…」

昌三の発言に、有仁は目を閉じる。

有仁

「竜共が、再び動くか…。だが、聖剣の力を手にした今、如何に七竜の眷族といえど、片眼のフェルニゲシュごとき、怖れるほどのものではない。こそこそと動きおる祝福無き者どもにしても、我らを利用しておるつもりだろうが…、さて、どちらがウワテかの？」

昌三

「しかし陛下。あの得体の知れない者たちは、未知の力を持っています。このまま、隠し通せるものでしょうか？」

昌三の質問に、有仁はただ答える。

有仁

「卿も用心深い男よな。それが心強くあるが、人を導く者なればこそ、揺るぎなき大胆さも必要ぞ」

それを聞き、昌三はその言葉を胸に刻む。

有仁

「我らは、数千年の禍根を断とうとしておるのだ。真の変革のため、この身を犠牲にする覚悟もできておる」

昌三

「では、蒼の竜騎士と光の戦士が、何やら動いているようですが、彼らも…」

有仁

「放っておけ。人には、それぞれ己が役割というものがある。…そう、『力』を得た卿らにもな」

そう言って、昌三の身体が魔力に包まれ変貌する。

昌三

『ハッ…。すべては、『陛下』の名の下に…』

異端者の長

君達は、異端者の長を探してオクシデンス・ヴァルマーレ高地に向かった。

そこで景太郎卿に話しかけることになる。

(※GMメモ：RP待機)

景太郎

「おお、暗魂の冒険者様方ではないか！先日の件では、大変に世話になったな。しかし、ご友人に加え、蒼の竜騎士殿も一緒とは…。いささか奇妙な取り合わせに思えるが、何用かな？」

エクセリア

「お初にお目にかかります、景太郎卿。

《占星台》から、邪竜の眷族による再攻撃に関する、警鐘が発せられたことは、既に把握されているかと思います。

その件に関連して、我々は異端者の頭目『氷の巫女』を追っているのです。そこで、最新の異端者関連の情報があればと考え、こちらに立ち寄った次第…」

(※GMメモ：RP待機)

景太郎

「ふむ、そういうことであれば、我が部下に話を聞くといい。

周辺地域の哨戒に出ていた部隊が、そろそろ戻るはずだ。それに加え、異端者達のアジト跡を調べている部隊もいる。『夷拝の牧場』に向かえば、何かわかるかもしれん」

ヴォルフラム

「…ならば、二手に分かれよう。俺は哨戒部隊の帰還を待ち、話を聞いた後に合流する。お前達は、先に牧場に向かっておいでくれ」

そう言って、君達に指示をするヴォルフラム。エクセリアの眼が、一瞬だが金色に光ったように見えた。

ともあれ君達は、牧場に向かって事象の確認をすることになるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

…移動すること数分。君達は、牧場に辿り着いた。そこで、調査隊の衛士隊長——景太郎卿から指定された聞き込み対象——から話を聞くことになるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

調査隊の衛士隊長

「…アジトの調査状況でありますか？それが、困ったことになっているのですよ…。

アジト内で異端者共が遺した書簡を発見したところ、物陰から突然、『魔物』が飛び出てきてまして…。

異端者たちが放っておいたもののようですが、おかげで負傷者が出ています。魔物を排除できれば、調査が進むのですが…」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…仕方ない、ここは私達でどうにかしよう。足踏みしている時間など、ないのだから」

そう言って、エクセリアが走っていく。

追っていくと、斬鉄剣を構えるエクセリアが、白熊を倒していた。

エクセリア

「…流石に、白熊が相手はしんどいな…。他に隠れている魔物がないか探して、安全が確認できたら、『調査隊の衛士隊長』に声をかけてくれ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「お前がやれ、だって！？嫌だね、私が物語に過剰に干渉するのはあまり好ましいことじゃないだろうしね」

渋々、君達は牧場の地下に潜っていく。

そこに、やはりというか、白熊がいた。

敵：ティムド・ウォーベアー、ティムド・ポーラーベアー

君達は、魔物を退けた。『調査隊の衛士隊長』に報告するでしょう。

調査隊の衛士隊長

「えっ、魔物を倒したですって！？た、助かりました…これで異端者達の足取りを追う、手がかりを見つけることができるかもしれません」

(※GMメモ：RP待機)

調査隊の衛士隊長

「…なるほど、『氷の巫女』たちの足取りを追っているんですね。我々が発見した『異端者が遺した書簡』は、彼らの連絡記録のようでした…。魔物に襲われたため、詳細な内容は分かりませんが、確認してみる価値はあるはずです。行ってみましょう」

探索判定 目標値：31（3回目のみ、目標値：35）

3回成功するまで繰り返す。

君達は、『異端者の書簡』を『調査隊の衛士隊長』に渡した。

調査隊の衛士隊長

「ありがとうございます。お三方から受け取ったものを合わせると…、10通以上になりますね。…ふむ、なるほど。どうやらこれらは、『無窮環劇場』に潜伏する、奴らの仲間とのやりとりを記した記録のようです。食料その他を手配する旨が記されています。…ということは、あの劇場にまだ異端者共が？」

エクセリア

「…『無窮環劇場』か…。確かそこでは、嘗て『疑似氷神シヴァ』を制御するためのデータ取りをしたところだったな…。どうにも、因果は巡ってくるようだ」

ヴォルフラム

「だが、あの劇場まで陸路で行くとなると、豪雪地帯を通らなければならんぞ…。危険な上に、何より時間がかかる」

(※GMメモ：RP待機)

そうして思考をしている君達は、ある案を思いつく。
——その案は、エクセリアに負担をかけるものだった。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「確かに、キューサーを使えば、確実に運べるが…そんなことをしなくても、単純に運ぶ方法ならあるよ」

そう言って、エクセリアは牧場の外へ行く。

エクセリア

「黒き疾風よ、今こそ空を征く翼となりて顕現せよ！来い、ブラックフェザー・ドラゴン！」

呼びだした黒い竜に、エクセリアが騎乗する。

エクセリア

「さあ、乗るんだ！」

(※GMメモ：RP待機)

それに君達が、そして渋々ヴォルフラムが騎乗する。
そうして向かった先…無窮環劇場にて、敵が立ちはだかる。

異端者

「我らを根絶やしにするつもりだな！ヴァルマーレの衛士どもめ！」

それを見たエクセリアは、少し目を閉じて視界を『切り替える』。凍てつくような氷の色に、異端者達の魂が染まっていた。エクセリアはため息をつきながら、後ろへ下がる。

ヴォルフラム

「お前も手を貸せ」

エクセリア

「いやだ断る。第一、そいつらは弱い。…私ひとり欠けたところで、何の障害も発生はしないだろう」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、エクセリアは後ろに下がる。

敵：異端者×8

7ラウンド経過で、戦闘が終了します。

4ラウンド目：後ろで下がっていても…

君達が戦っていると、ひとりの剣術士が姿を現す。それが魔剣を掲げる。

血族のウジェネール

「やはり人の姿では、限界があるか…。

今こそ竜より授かりし至高の力…見せてくれるッ！」

その者はその魔剣を飲み干し、竜へと変じた！

敵追加：血族のウジェネール

戦闘終了後

君達は、ひたすらに戦っていた。

しかし、終わりの見えない増援に、君達は頭を抱えるだろう。

(※GMメモ：RP待機)

異端者

「クソッ…つ、強い…。このままでは、被害が増えるだけか…。同志達よ、無窮環劇場は放棄する！『灰のねぐら』に退くぞッ！」

そう言って、異端者達は逃げ去るだろう。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…『氷の巫女』の姿はなし、か。せめて居所を聞き出せればと考えたのだが…。恐らく、『灰のねぐら』に行けばいいのだろうが…」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、エクセリアは思案する。
そもそも灰のねぐらとはどこなのだ、と。

ヴォルフラム

「…恐らく、山門護湖のことだろう…。山門護湖は、ここオクシデンス・ヴァルマーレ高地の西端だ。しかしその前に、寄っておきたいところがある」

撤退の道中で、ヴォルフラムが示した場所…。独立部隊が大氷原『双子湖』に露営地を築いているから顔を出したいとのことだ。

連隊長の名は、タケシ。彼らの目的は、邪竜の眷族を狩り、名を成すことだが…

ヴォルフラム

「もしかしたら、異端者を目撃した者がいるかもしれん…。情報を集めておいても損はないだろう」

とのことだ。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「ああ、その助言に従わせてもらうよ」

彼と会話しながら、凍える身体に鞭を打って、オクシデンス・ヴァルマーレ西端へと向かった。

そうして、会話を重ねながら、君達は——露営地に辿り着いた。

タケシ

「あぁん？なんだ、また面妖な連隊加入希望者か？もう勘弁してくれ。これ以上、うちから犠牲者を出すのは嫌だからな」

(※GMメモ：RP待機)

ヴォルフラム

「おいおい、俺の連れをあんまりいじめんでくれ」

タケシ

「なんだテメェ？蒼の竜騎士だろうと容赦はしねえぞ！？」

(※GMメモ：RP待機)

一触即発の雰囲気漂う中、エクセリアがキレる。

エクセリア

「情報はない、ということでよろしいか？私達はあなた方の連隊に入りに来たわけでも、喧嘩をふっかけに来た訳でもない！」

そう言って、エクセリアは立ち去る。

君達はそれを追って、出ていくだろう。

ヴォルフラム

「悪いな、俺の連れはあぁなんだ」

タケシ

「ああ、分かっているよ、蒼の竜騎士殿。それで、こんな危険な場所に、何の用があって尋ねてきたんだい？」

ヴォルフラム

「実は、『異端者』どもを追っている…」

タケシ

「なるほどな。俺はそんな連中は見えないぜ。うちの連隊の中に、見たやつがいりゃあいんだがな…」

…その後、ヴォルフラムが聞いて回ったものの、情報は得られなかった。

——エクセリアの霊子の魔眼は、万物を見抜く。

秘された事象も、そのための道程も。

螺旋の剣を刺し、『紫色の煙を放つ助燃剤』をそれにくべる。

螺旋の剣が手繰り寄せて放つ炎は、助燃剤を燃やし、天に紫色の煙を放った。

ヴォルフラムが合流した頃には、それが行われていた。

(※GMメモ：RP待機)

ヴォルフラム

「それで、目的は果たせそうか？」

エクセリア

「…霊子の魔眼は万物を見抜く。それ故に、何をしようと事実としてそれがバレる。

隠蔽は無駄なんだ」

そう言って、紫色の煙を放つ篝火を眺めつつ、エクセリアは雷放射を待った。

(※GMメモ：RP待機)

異端者の長

「やはり、あなた方だったか…」

雪の坂を上り、彼女は君達の元へ来る。

異端者の長

「同志達から、報告は受けていた。どうか、仲間の非礼を許してほしい。

——私を追う理由を、聞かせてもらえるだろうか？」

エクセリア

「…………それよりも先に、名乗るのが先決じゃないのか？なァ…セルマ・ダングラン」

セルマ

「…なぜ、私の名前を…？」

エクセリア

「私の魔眼がなんなのか、分からないとは言わせないぞ。霊体視の魔眼、霊子の魔眼…さ
まざまな名で呼ばれる『虹色の目』。それが一度目で捉えると、万象を主に伝える。

…私は、こんなことでこれを使いたくはなかったがな。あなたを、あなたという人間を誘い出すには必要な手段だった。

それで、理由？フェルニゲシュを止めるためだよ」

(※GMメモ：RP待機)

セルマ

「そうか…。フェルニゲシュの眷族を止めるために対話を…。あなたの決意は、本物なのだな。しかし、竜と人との対立の根源にある、隠された真実を知らねば、対話も叶わないだろう」

エクセリア

「…見通してはいるがな。これは、冒険者、お前の物語だ。私だけが知って満足すべきものではない」

——セルマ曰く。

数千年続いた戦いのはじまり、その 200 年前。エルフの一団が、このヴァルマーレの地にやってきた。当初は、ドラゴン族との小競り合いが絶えなかったが、やがてひとりの乙女が、ふたつの種族の架け橋となる。…彼女の名は「シヴァ」。

彼女は、高い知性と理性を持つ竜と対話する中で、『七大天竜』の一翼である聖竜『フレースヴェルグ』と出会い、種の垣根を超えて、彼の竜を愛するようになった。

(※GMメモ：RP待機)

だが人の命は、竜のそれに比べて遥かに短い。どんなに長く生きようとも、エルフは 500 年もすれば死ぬ。一方で竜は、千年万年の時を生きる…。

シヴァの愛を受け入れたフレースヴェルグも苦悩した。やがて『死』が、二人を分かちという『現実』に。そしてシヴァは懇願した。魂となって永遠に寄り添うために、自分を喰らって欲しいのだと。

——斯くして、シヴァの魂はフレースヴェルグに宿り、これを知ったドラゴン族と人は互いを認め、融和への道を歩んでいった。ふたつの種族は協力し、このヴァルマーレを花開かせた。しかし、『竜の眼』に満ちた力は人の心を惑わせ、この蜜月関係は 200 年ほどで終焉を迎えることになる。

(※GMメモ：RP待機)

人は欲望を抑えきれず、自己のために「七天天竜の眷族」を騙し討ち…、その『眼』を奪ったのだ。

セルマ

「今、ヴァルマーレを襲わんとしているのは、『七天天竜の眷族』の一翼にして、人の裏切りにより『眼』を失った、フェルニゲシュとその眷族。

かの竜の目的は、奪われた『眼』の奪還だろう。それが叶わぬ限り、対話に応じるとは思えないが…」

と考えるセルマに対し、否を突きつけるヴォルフラム。

ヴォルフラム

「お前の語る過去が『真実』であるかどうかは別として、確かに以前、フェルニゲシュは『竜の眼』を狙っていた。だからこそ、俺は危険を承知で『竜の眼』を持ち出し、都市を離れて、各地を転々としていたのだ。奴を、帝都から引き離すためにな」

その証拠に、彼は紅い竜の眼を取り出す。

(※GMメモ：RP待機)

ヴォルフラム

「これまで奴は、執拗に俺を狙い続けてきた。だがここに来て狙いを『等護』に変えた。そこには奪還すべき『眼』がないことを承知の上でだ」

それを聞き、セルマが腕を組む。

セルマ

「…帝都攻撃の理由が、別に——」

エクセリア

「竜の眼を奪還するよりも先に、成さねばならない理由がある、ということだろうよ」

ヴォルフラムが、セルマが、君達が、エクセリアを見る。

エクセリア

「これは、『前の周回』の私の基準での話だがな。

帝都等護を襲う理由が、『星の守護者として顕現を許せない存在である』とすれば？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「いずれにせよ、眼をすべて返還するまでは、フェルニゲシュとの確執は終わらないまま…。それに、他の勢力が妨害せんとも限らない…。

それに、フェルニゲシュには直属の上司がいる。ニーズヘッグだよ」

そう言って、エクセリアは可能性を示唆する。

かつてセルマが、フレースヴェルグと邂逅した地…。山門山に抱かれし、竜の領域ウィルムフロア。フレースヴェルグは、その高空に広がる雲海に棲まうという。

n 人旅 ～高地ウィルムフロア～

君達は、セルマに案内されるように、高地ウィルムフロアへと足を踏み入れた。

ヴァルマーレの中央にそびえる、ジャパネーゼ列島の背骨、大岩山脈。

霊峰『山門山』を仰ぎ見るこの地は、ドラゴン族の本拠地として知られる。

竜がその空を支配する領域に、冒険者たちは足を踏み入れるのだった。

(※GMメモ：RP待機)

セルマ

「ここが、高地ウィルムフロアの玄関口だ。このまま、更に西へと進み森を抜ければ、我らの目的地、霊峰『山門山』へと続く山道がある。だが、山門山の頂に至るまでの道のりは、遠く険しい。途中にある集落に立ち寄り、最後の準備を整えようと思うのだが、どうだろうか？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「その気になれば、私が顕現して空を舞えばいいが…、そうも言ってはいられないか。

ジョセフから口酸っぱく『顕現するな』と言われていたんだ、流石にそれをするのは野暮かもな…」

彼女らは話し、野生の動物を狩る者たちが住まう集落に向かっていく。
ついていくとしよう。

(※GMメモ：RP待機)

集落「テイルフェザー」

君達は、話しながらテイルフェザーという集落に到着した。

(※GMメモ：RP待機)

そこにいる、エルフの猟師の男…ギャロンに、君達は声をかけた。

ギャロン

「こんな辺境の猟師村に、客人とは珍しい…」

彼がセルマの顔を見ると、喜んだように立ち上がる。

ギャロン

「おや、その懐かしい顔は、セルマ嬢ちゃんじゃないか！」

(※GMメモ：RP待機)

セルマ

「お久しぶりです、ギャロン。お元気そうで何よりです。彼らは、私の旅の同行者たち…。故あって『山門山』に向かうつもりなのですが、この集落で、休息を取らせてもらえませんか？」

ギャロン

「そりゃあ勿論、セルマとその友なら歓迎さ。だが、『鳥獣の森』を出るのは、正直オススメできないぞ。このところ、ドラゴン族が妙に殺気立っているからな」

(※GMメモ：RP待機)

君達の問いに、ギャロンは少し考え込む。

ギャロン

「なんだお前ら、セルマの連れだっていうのに、そんなことも知らんのか？この森は、巨大な『関門樹』が林立しているからな。その樹冠に覆われて、空から地上が見えないんだ。おかげで、ドラゴン族はここを狩り場にしないし、鳥獣などの野生生物も安心して暮せる。俺達狩人も、空に気を配らず狩りができるって訳だな」

(※GMメモ：RP待機)

それに、ドラゴン族以外にも気になるところがあると、彼は言った。

報酬

基本要素

- ・経験点：15000 点
- ・資金：7500G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：9 回

マジテックトームストーン

- ・詩学：300 個